

## ギルバート・イムレーのアメリカ便り

——『北米西部地誌』を読む——

大井 浩 二

アメリカ人ギルバート・イムレーの著した『北米西部地誌』<sup>(4)</sup>という書物が1792年にロンドンで上梓されたが、これがなかなかの好評で、翌93年には第2版が刊行され、同じ年にアメリカでも翻刻される。さらに1797年にはイギリスで第3版が出版されただけでなく、ドイツ語に翻訳されているという事実からも、イムレーの本の人気のほどを察することができるにちがいない。この『地誌』のとくに興味深い点は、それが11通の手紙から構成されていることで、その意味では、これは未知なる「新世界」アメリカの気候、住民、河川、産物、動植物などを詳しく紹介する目的で、植民地時代から書かれていたアメリカ便りという形をとっている、と言ってよい。その上、この本は版を重ねるにつれて付録の部分が長くなり、オハイオ川流域一帯の開拓に関する15編ばかりのパンフレットの類いが収録されているために、当時のフロンティアの状況を知るのに便利この上ないアンソロジー的な作品となっている。その意味でも、さまざまな情報を収集したアメリカ便りという性格が一層強く打ち出される結果となっている。だが、『地誌』は1790年代には、アメリカに関する貴重な情報を提供する書物として重要であったかもしれないが、それから200年以上経って、アメリカ合衆国がまったく異なった様相を呈するにいたった現在、イムレーを読むことに一体どのような意味があるだろうか。

著者ギルバート・イムレー(c. 1754-1828)については、あまり詳しいことは分かっていない<sup>(5)</sup>。生まれはニュージャージーで、独立戦争には短期間ながら参加して負傷を受け、中尉にまで昇進したらしい。ケンタッキーに移住したイム

レーは、1783年から86年にかけて土地を買いあさり、84年にはフアイエット郡の測量技師に任命されたこともあった。だが、土地の売買をめぐる裁判沙汰に巻き込まれて、ケンタッキーから姿を消した彼は、やがてアメリカ合衆国からも脱出することになるらしいが、1786年から92年にかけての足取りはまったく不明である。『地誌』がロンドンで出版されているので、この時期にはイギリスに滞在していたと思われる。イムレーはまた文才に恵まれた人物で、『移民民たち』という小説を1793年に出版している。その前年の終わり頃にフランスに渡った彼は、ミシシッピー川流域にあるスペイン植民地を奪回するというフランス側の陰謀に加担することとなる。『地誌』の著者としてのイムレーは、アメリカ西部の事情に詳しい人物とみなされ、「貴重なアドバイザー」<sup>(6)</sup>の役割を果たしていたのではないかと、という見方もある。この陰謀が失敗に終わったあとは、フランス政府に穀物や鉄などを納入する事業を手掛ける、といった調子で、なかなか変わり身の早い策士でもあったらしい。結局のところ、イムレーは、あの有名な「パリのアメリカ人」<sup>(4)</sup>、1780年代から90年代にかけて、パリの至るところに出没したアメリカ人の実業家、旅行者、外交官、冒険家の一人にほかならなかった。

だが、イムレーの名前は、現在ではもっぱら、イギリスの女権拡張運動家メアリー・ウルストンクラフト(1759-97)がウィリアム・ゴドウィンと結婚するまえに同棲していた恋人として記憶されている。ウルストンクラフトは『女性の権利擁護』の著者として有名だが、1793年4月頃に出会った二人の仲は、フランス革命後の混乱した状況のなかで急速に進行する。イムレーというアメリカ人のなかに理想の男性像を見いだしたと信じるウルストンクラフトは、翌94年5月にファニーという女兒を出産するが、イムレーが実業家として多忙になるばかりか、別の女性と同棲し始めたこともあって、絶望した彼女はテムズ川に身を投げて自殺を図り、やがて冷えきった二人の生活に終止符が打たれる。妻と娘を裏切った行為をゴドウィンの書いた回想記のなかで暴露されたあとのイムレーの行状については、ほとんど何も分かっていないが、早くから母に死なれ、父に捨てられた娘のファニーが1816年に自殺したあとも生き延びた彼は、

1828年11月20日にジャージー島で生涯の幕を閉じている。

世評の高い『地誌』の著者という肩書をひっさげてパリに乗り込んだイムレーが、アメリカ事情に詳しい「貴重なアドバイザー」として、たちまち政治的陰謀に引き入れられた、というエピソードからも明らかなように、当時のフランスでは「新大陸」アメリカに対する関心が高まっていた<sup>6)</sup>。たとえば、1788年以降のパリでは、投資や逃避を考えているフランス人たちの間で、北米のフロンティアの土地を買い求める動きが盛んになり、「アメリカの夢」がかき立てられていた。そうした状況のなかで発生したのが、サイオトー土地会社事件であった。バステューニ陥落から間もない1789年8月に設立された会社が南オハイオの土地を売り出し、それを購入した1000人ばかりの移民が翌90年にアメリカに渡るけれども、現地での受け入れ態勢が整っていなかった上に、運営資金を持ち逃げされて会社が破産寸前に追いやられる、といった理由で、移民の多くは失意のうちに帰国を余儀なくされる。この不幸な事件はフランス国民のなかに一種の反米感情を生むことになったが、アメリカに関する正確な知識が不足していただけでなく、アメリカの素晴らしさが実際以上に誇張されて伝えられていたことも原因に教えられることができる。クレヴクルの『アメリカ農夫の手紙』(1782)、フランクリンの「アメリカへの移住を希望する人々への情報」(1784)、トマス・ジェファソンの『ヴァージニア覚え書』(1785)<sup>6)</sup>などが発表された背景に、フランスにおけるアメリカ熱という事情が働いていたことを見落としてはならない。イムレーの『地誌』もまた、そうしたアメリカの情報を提供する書物の1冊として愛読されることになった、と考えていいだろう。

すでに触れたように、この『地誌』は書簡体で書かれているが、11通の手紙はすべてケンタッキーが発信地で、「親愛なる友よ」という呼びかけで始まっている。第1書簡の冒頭に「どんなに困難であっても、あなたから与えられた仕事をやってのけることを、最大の楽しみにしている」と記したあと、第2書簡の末尾では、ケンタッキーの開拓に関する歴史を不完全ながら示すことができたので、つぎには「あなたの要求に答えて」、この地方の産物について語る

ことにしたい、と述べたり、「住民や、住民の生活様式、開拓の方法、現地までのルートや距離や旅行の手段」などについて知りたいだろうが、とても手紙では書き切れないので、散漫な形の情報にならざるを得ないという弁解の言葉で、第7書簡を書き起こしたりしている。あるいは、第10書簡の結末に、「このように新しくて広大な土地は、その博物学を完全に伝えようとするためには、手紙に許されている以上の時間とスペースが必要である」と書かれていることから明らかなように、『地誌』はケンタッキーに住んでいるアメリカ人から、おそらくはイギリス人の友人に宛てた手紙、という体裁を取っている。しかも、この手紙の書き手というのは、著者イムレー自身ではなくて、アンソロジーとしての『地誌』の編者イムレーが付けた格好の序文によると、「ケンタッキーの開拓の早くからの目撃者」で、「25歳になるまで、アメリカの未開拓地で暮らしてきた人物」（イムレーは東部の出身であった）とされている。このペルソナ的書き手については、「無垢の状態にある人々に備わっている、あの態度の単純素朴さになじんでいる」という表現も用いられている。こうした基本的な設定のなかに、自然の状態で暮らしている無垢なアメリカ人、いわゆるアダムのアメリカ人が18世紀末のアメリカの事情をヨーロッパの読者に書き送っている、という図式を読み取るべきではないのか。その意味で、イムレーの『地誌』は、典型的なアメリカ人としての農夫が書き綴ったとされているクレヴカールの書物の延長線上に置くことができるかもしれない。

いずれにせよ、『地誌』におけるイムレーの描写は詳細をきわめている。彼のいうところの「西部」の定義が示されているかと思うと、オハイオ川の急流についての説明がなされている。砂糖や塩の採取方法を論じる一方で、小麦粉、トウモロコシ、牛肉、豚肉などの値段まで書き付け、ときには動物や植物の名前を煩わしいまでに列挙している。黒人奴隷や先住アメリカ人に関する考察にスペースを割くことも怠っていない。とにかく、ケンタッキーを中心とする「西部」の状況が微に入り細を穿つように描出されている。現在の読者からすれば、さして重要とも思われぬ大小さまざまな事実にこだわっている書物というのが、イムレーの『地誌』の第一印象ではないだろうか。彼自身、「わた

しが若干の細部に立ち入ったのは、この地方の住民や状況について、あなたがより明確な認識をもつことができるようにするためである。わたしは心地よい発言をするよりも、情報を伝えることを目指している」と語っている。こうした説明からも、『地誌』におけるイムレーの目的が、アメリカに関する正確な情報の提供にあった、と言い切ってもよい。

だが、そうしたイムレーの姿勢を浮き彫りにしているのは、彼がしばしばトマス・ジェファソンの名前を呼び込み、その著『ヴァージニア覚え書』の文章を引用している、という事実にはかならない。たとえば、ケンタッキーにおける動植物の生態や分布について語るにあたって、イムレーは「より完全な情報」は『覚え書』に示されている、と述べているだけでなく、「ビュフォンが偏見によって犯した間違いは、ジェファソン氏によって見事に論破されている」と書き加えている。また、動物に関する説明を省略したのは、「それを十分に正確にすることができないためであるが、ジェファソン氏によるアメリカに土着の動物のリストのなかに、それらすべてについての説明が見いだされる」とも語っている。第4書簡のケンタッキーの人口に関する箇所では、ヴァージニアのそれに関する『覚え書』の質問8における記述を引用するだけでなく（ただし、1772年を1702年、95年以内を96年以内、とそれぞれ誤記している）、ジェファソンの書物には「今後のわたしの手紙のなかで、しばしば言及する機会があるだろう」と断っている。『地誌』を執筆するイムレーが、数年前に出版されていた『覚え書』を手元に置いて、随時参照していたであろうことは、その後の記述からも容易に想像することができるのである。

ジェファソンの『覚え書』は、彼が生前に刊行した唯一の書物で、地理学か統計学のテキストのような一冊には、ヴァージニアに関する正確で詳細な情報が満載されている<sup>9)</sup>。これはジェファソンがヴァージニアの知事時代に、アメリカ合衆国に関する情報を収集しようとした駐米フランス公使館の書記官ド・バルベ・マルボアの質問状に対する回答という形を取っている点で、友人の質問に答えるために書簡体で書かれた『地誌』と一脈相通ずるところがあると言えるかもしれない。また、イムレーの指摘にもあったように、1785年にフランスで刊

行された『覚え書』が、この国の著名な博物学者ビュフォンの学説を批判攻撃していることは、周知の事実であるが、それは「新大陸」が人間を墮落させる、劣悪な環境であるという通説を打破することをジェファソンが目指していたからであった。したがって、『地誌』がたえず『覚え書』を引き合いに出しているのは、イムレーもまた基本的には、アメリカに関するさまざまな事実をヨーロッパの読者に送り届けることを意図していたことを示しているのである。

そのことは、しかし、イムレーが『覚え書』の記述を無批判に受け入れていた、という意味ではない。オハイオ川を説明する第5書簡におけるイムレーは、「この川の氾濫は3月の末頃始まり、7月におさまる」（引用は中屋健一訳による）という『覚え書』質問2の記述が不正確であることを指摘したあと（イムレーは「この川」を「オハイオ川」と書き換えている）、ジェファソンの博学ぶりには敬意を表しながらも、「この地方に足を踏み入れたことがないために、ヨーロッパ人にとって不愉快でないような説明をあたえている」という一文に続けて（さきに引用しておいた「心地よい発言をするよりも、情報を伝えることを目指している」という『地誌』の言葉が思い出される）、「だが、彼の政治生活の特徴づけているすべてのものと同様、この点に関する彼の判断は皮相的であり、彼の頭脳は自分で勝手に作り上げた理論に固執しているように見える」と、きびしく非難しているのである。ケンタッキーの政治や法律を紹介する『地誌』の第8書簡では、ヴァージニアの憲法に関するジェファソンの所説（『覚え書』質問13）を詳しく検討した上で、かなり露骨な表現で批判攻撃している。たとえば、同じ選挙人によって選ばれた下院と上院は同質的になるので、これは改めるべきではないか、といジェファソンの意見を、イムレーは「早まっている」の一語で片付け、政府のすべての権力が立法部に依存するのは「まぎれもなく専制政治に外ならない」というジェファソンの意見については、「こうした議論は、もしその唱導者がアメリカの独立のための輝かしい闘いにおける経歴と、身につけた枢要徳とのゆえに尊敬すべき人物でないならば、軽蔑以外の何物にも値しないだろう」と述べ、「自由の支持者たちの間で名声を博している才能と天分に恵まれた人々が、杜撰な意見をいたずらに広め

ることによって理性の進歩を遅らせるのは、まことに嘆かわしい問題である」と付け加えている。別の箇所では、立法、司法、行政の「三権が最少限度の数の代表者による議会の手に掌握されるようになるかもしれない」云々というジェファソンの発言を批判して、『地誌』の著者は「このような考えはまったく幼稚であって、凡庸な政治家の頭にさえ浮かんだことがないように思われる」とさえ言い切っている。こうしたジェファソン批判は、奴隷制度を論じる第9書簡にいたると、さらに一層辛辣になり、黒人奴隷の解放が「われわれにとって栄光であると同様に、彼ら自身にとって栄誉である」と考えるイムレーは、「ジェファソン氏の本を読みながら、最も賢明で博愛的な同国人の一人が不幸な黒人に対して破廉恥な偏見を抱いているのを見て、恥ずかしく思っている」と書き、「彼の精神は教育と思考の習慣とによってすっかり歪められている」とも語っている。

こうして、イムレーは『地誌』のここかしこにジェファソンを批判攻撃する文章を書き付けているが、それはけっして否定のための否定ではなかった。まえに指摘しておいたように、ジェファソンの『覚え書』は、ヨーロッパに残存しているアメリカについての偏見や誤解を一掃するために、ビュフォンの学説を否定する結果になっていた。それと同じように、イムレーの『地誌』は、アメリカ合衆国に関する正確な情報を提供しているとされている『覚え書』の記述に異議を唱えることによって、より一層正確な情報と知識をヨーロッパの人人に伝えることを意図している、と言えるのではないか。ジェファソンの黒人に対する態度を非難する文章のなかで、「彼がさまざまな偏見の露骨な証拠をヨーロッパ人に示したとすれば、そのようなものがアメリカ国民の一般的な意見であり得ないということを、彼のいくつかの逆説から判断する機会を世間の常識に与えたことになる」とイムレーは書いているが、この発言は彼の目的がアメリカに関する「偏見」を正し、「アメリカ国民の一般的な意見」を常識的なヨーロッパ人に提供することであった、という事実を裏書きしているのである。

だが、『覚え書』におけるジェファソンが一貫して客観的、科学的な態度を

崩していないのに反して、『地誌』におけるイムレーはややもすれば主観的、印象的な記述に流れる傾向があることを否定できない。ラルフ・ウォードルは、イムレーが「しばしば、そうするだけの十分な理由がないように思われるとき」でさえも、「土地や人間に関する事実に基づく説明から離れて、専制的な政府や既成の宗教を攻撃したり、風景の美しさや自由の喜びを長々と述べたり、普遍的な完成の時代を予測したりしている」<sup>6)</sup>と論じたあと、つぎの一節を実例として引用している――

この広大な草原を夕陽が金色に彩る一方で、夏の夕方の穏やかなそよ風が、うっとりとしている感覚に働きかけて、心を和ませたり、愛情や友情を抱かせたりする。姿を隠したままで、高みから野生の動物のたわむれるさまを楽しむことができるが、この動物たちは草原の王者として、何の屈託もなく歩き回っている。神よ、何という魅力が自由には備わっていることか！低次の動物を奴隷とするために生まれてきた人間がみずからを奴隷にしてしまってから久しい。だが、ついに理性は、輝かしい微笑を浮かべ、優雅な誇りを抱いて、二つの半球を照らしている。そして、黄金の羽飾りをつけ、凱旋車に乗った「自由」は、いまや長い間失われていた支配権を回復するにちがいない。

あるいはまた、別の箇所では、ケンタッキーの自然の素晴らしさを描写するにあたって、イムレーは「ここではすべてが、世界のほかの地域でわたしが見たことの無い威厳と光彩を帯びている」と述べたあと、つぎのように熱っぽく語っている――

ここでは永遠の緑草が支配し、北緯39度の輝かしい太陽が紺碧の空を突き抜けて、この豊饒な大地のなかに、まことに驚くほどに早々とした成熟を生み出す。草花の栽培家の手で育てられたかのように、魅惑的な香りと、色彩と自然が作り出すことのできる多様な魅力をすべて備えた、満開の完全な花々が、ここでは優雅と美の膝に抱かれて、ほほえみ交わす森を飾っている。柔らかな西風はそと芳香の息を吹きかけ、吸い込まれた空気は、うっとりとしている感覚を狂喜させるように思われる健康と活力の官能的な輝きを発する。森の甘い歌い手たちは、この温暖な気候の及ぼす力を感じているように見え、もっと柔らかく、整えられた調子で、愛と自然とに調和した優しい歌をさえずる。



さらにイムレーは、全体を要約するような形で、「ここではすべてが喜びを与え、わたしたちの周りに降り注いでいるあの穏やかな光彩のなかで、わたしたちの恵み深い創造主が授けてくださったあの精神の高まりに対する熱烈な感謝の気持ちを感じる。人間の卑劣さや墮落ぶりに嫌悪を覚えたりするどころか、人間を創造するにあたって自然がわたしたちに与えてくれたあの威厳を感じる」とまで言い切っている。だが、さすがの彼も、この手放しの感激ぶりを気恥ずかしく思ったのか、「あなたがラプソディーと呼ぶにちがいないもの」を大目に見てほしい、と付け加え、そこに描かれているのが、3月のある日、アレゲーニ山脈を越えて来た彼の目に映った実際の風景であった、とわざわざ弁解しているのである。

この美辞麗句で飾られたイムレーの長たらしい文章を紹介したのは、『地誌』を論じる批評家たちが例外なしにそれを引用しているからにはほかならない。たとえば、「この途方もなく高揚した一節」のなかに「庭園のプロトタイプ」を読み取ったアーサー・ムーアは、それが「ケンタッキーのパラダイスの性格」を定着させるのに役立ったという点を強調し、イムレーの「過激な牧歌主義」に注目したジョン・シーリーは、「イムレーにとって、西部は主としてケンタッキーと同一視される牧歌的なパラダイスである」という評言に加えている。ロバート・ローソン＝ピーブルズは「フランスのワインがイムレーの頭にきてしまったらしい。ここでの彼の文章ははなはだ不自然で、迂言法と最上級とラテン語系の単語の寄せ集めである」と説明し、「彼の書物のほかの箇所では、イムレーはたしかに有益な情報を——たとえば、ミシシッピ川沿いの町と町との間の距離——提供しているが、全体的な印象は誇張されていて、アメリカの土地の現実とほとんど関係がないように思われる」と結論している<sup>9)</sup>。

正確なアメリカ情報を伝えることを目指したはずの『地誌』が、夢と希望にあふれた地上の楽園としてのアメリカのイメージをかき立て、アメリカにまつわる神話を否定するはずのイムレーが、新しいアメリカの神話を生み出すことになったというのは、アイロニカルな成り行きと言うほかはあるまい。だが、そのような性格が『地誌』にあったからこそ、イムレーは18世紀末のフランス

で「パリのアメリカ人」として活躍することができたのではないのか。あるいは、そこに窺われる「庭園のプロトタイプ」は、第2、第3のサイオトー土地会社事件をヨーロッパの各地で引き起こす危険な可能性をもっていた、と考えることもできよう。いや、イムレーと恋に落ちたメアリー・ウルストンクラフトが彼とともにケンタッキーへ移住することを夢見ていたとすれば<sup>99</sup>、それは『地誌』のなかで賛美されている「永遠の緑草」や「紺碧の空」や「柔らかな西風」などの風情に惑わされたためであった、とさえ主張することができるかもしれない。

たしかに、ジェファソンを批判することによって、より正確なアメリカ便りを送り続けたイムレーが、甘いアメリカのイメージをちりばめた『地誌』を書きあげたというのは、滑稽としか言いようがないだろう。しかし、彼のロマンティックな喜劇役者ぶりは、じつは「新世界」アメリカに対する彼の基本的な姿勢と切り離して考えることができない。というのも、『地誌』におけるイムレーは何かにつけて農民や農業の話題を持ち出している。ある時は、ケンタッキーの土地がいかに農耕に適しているかを熱っぽく論じ立て、またある時は、ケンタッキーへの移住民の大半が農民であるという理由で、土地の購入の方法から家畜の飼育にいたるまで、細々とした説明を繰り返している。とりわけ、第7書簡ではかなりの紙幅を費やして、牧歌的な生活を営む勤勉な農民の生活を生き生きと描出しているが、「肥沃な田畑、赤く染まった果樹園、快適な庭園」が見渡される西部のフロンティアでは、「友情」によって「美德」が生まれ、「美の創造が喜ばしい祝祭となり」、「理性的な快樂が魂を向上させ、汚れない至福に人間を馴染ませることによって、薄汚れた貪欲や悪しき習性は滅ぼされる」と論じているのである。イムレーはまた別の箇所でも、「文明の進歩において、農業はすべての国で人類の基本的な目的であったように思われる」と書き記しているが、こうした彼の農民賛美、農業賛歌は、「大地で働く人々」を「神の選民」とみなすジェファソンが、「耕作者の大部分が道徳的に腐敗するという現象は、いまだかつてどの時代にも、またどの国民にも実例のあったためではない」（『覚え書』質問19）と書き、「もう一度くり返すが、大地に耕作する者は

もっとも高潔でかつ独立した市民なのである」(質問 22) と述べていたことを思い出させる。『覚え書』のジェファソンと同じように、『地誌』のイムレーもまた自営農民によって構成される理想的な美德の共和国のヴィジョンを抱いていたのではないか。ジョン・シーリーが『地誌』の「過激な牧歌主義」を「ジェファソンの農本主義」と関連づけているのは、イムレーのロマンティックな「ラプソディー」が、彼の強烈なアメリカ意識に根差していることを暗示している、と考えたい。「イムレーを本気で受け入れることは困難であるとしても、彼の見解がトマス・ジェファソンによって共有されていたことは記憶に値する」というロバート・ローソン＝ピーブルズの発言があったことを指摘しておこう<sup>40</sup>。イムレーの『地誌』はコロンブスのアメリカ大陸到達からちょうど 300 年たった 1792 年に刊行されているが、それが現代の読者にとって興味深いのは、ケンタッキーあるいはアメリカをエデン的空間とみなす「過激な牧歌主義」のなかに、アメリカ人イムレー自身のアメリカ的な独断と偏見の「露骨な証拠」が見いだされるからではないだろうか。

こうして、イムレーの『地誌』を読もうとする読者は、そこに基調低音のように流れている「新世界」アメリカと「旧世界」ヨーロッパの対立という古くして新しい主題に耳を傾けることになってしまう。すでに『地誌』の序文で、11 通の手紙の書き手がアメリカの「単純さ」とヨーロッパの「いわゆるエチケットと教養」の「非常に大きな違いに気づいた」生粋のアメリカ人として紹介されたとき、この重要な主題は導入されていたが、第 1 書簡の冒頭近くでも、アメリカ便りを書くという仕事によって「こうした辺鄙な開拓地のアメリカ人の素朴な風習と理性的な生活と、ヨーロッパ人の歪められた不自然な習慣とを対照させる機会」が与えられることになる、という指摘がなされている。『地誌』におけるイムレーは「自然の魅力」にあふれたケンタッキーの住民たちが「地上の最も幸福な人々」であることを強調する一方で、「あなたの大陸に存在している、一般的に悪しき法律」や「宗教と政治を混合するあの有害な制度」を非難している。彼はまた「ヨーロッパは長い間、形式と権威に隷属させられてきた」という文章につづけて、「わたしたちの政府の組織が基礎を置いてい

る制度のように、非常に単純な制度を公平な目で判断する」ことの重要性を力説しているのである。

わたしたちは素朴を多くもち、あなたがたは人工を多くもっている。わたしたちは自然を多くもち、あなたがたは社会を多くもっている。自然は地形や知性を同じように形作ったが、あなたがたが前者を変貌させ、後者を墮落させたのに対して、わたしたちは両者の自然の象徴を保っている。あなたがたはより多くの偽善をもっていて、わたしたちは誠実である。あなたがたはもっと狡猾で巧妙であって、それはあなたがたの法律と習慣のために、あなたがたの性質の一部となってしまうている。

この第7書簡の最後に書き込まれている一節は、エデン的な「新世界」の自然と腐敗した「旧世界」の文明のコントラストという『地誌』の重要な主題の一つを何よりも鮮明に浮かび上がらせているのである。

イムレーの『地誌』は、出版当時のヨーロッパの読者にとっては、蜃気楼としてのアメリカのイメージをかき立てるばかりであったかもしれないし、現在の読者の立場からしても、そこに記されたデータや観察が実際的な価値や効用をもっているとは言いがたい。とすれば、イムレーの記述が誇張や偏見や潤色にみちていることを認めた上で、そこに見いだされるアメリカとヨーロッパという問題、歴史家ディヴィッド・ノーブルのいわゆる「二つの世界のメタファー」<sup>104</sup>の重要性を強調するのが、イムレーの苦むした書物の正しい読み方ではないだろうか。この長年にわたってアメリカ的想像力を支配しつづけていたメタファーが、『地誌』の出版からわずか100年後の1890年、フロンティアの消滅が宣言されるとともに、その機能を完全に失ってしまったことを知っている現代のわれわれとしては、そうしたアメリカ史の流れの意味を考えるためにも、イムレーの一連の手紙から浮かび上がってくる「新世界」のイメージに注目する必要があるかもしれない。『地誌』と同じ書簡体で書かれた小説『移住者たち』でもまた、フロンティアとしてのケンタッキーが舞台となっているが、そこでイムレーがわれわれに伝えようとしているメッセージは何か、という問題については、稿を改めて論じることとしたい。

## 注

- (1) Gilbert Imlay, *A Topographical Description of the Western Territory of North America*. Third Ed. (Augustus M. Kelley, 1969).
- (2) イムレーの伝記的事実については, Ralph M. Wardle, *Mary Wollstonecraft: A Critical Biography* (U of Kansas P, 1951); Eleanor Flexner, *Mary Wollstonecraft: A Biography* (Penguin Books, 1972); Claire Tomalin, *The Life and Death of Mary Wollstonecraft* (Harcourt Brace Jovanovich, 1974); Moira Ferguson and Janet Todd, *Mary Wollstonecraft* (Twayne, 1984) などを参照した。
- (3) Wardle, 189.
- (4) Durand Echeverria, *Mirage in the West: A History of the French Image of American Society to 1815* (Princeton UP, 1957), 118.
- (5) Echeverria, 116-47.
- (6) J. Hector St John de Crèvecoeur, *Letters from an American Farmer* (1782); Benjamin Franklin, "Information to Those Who Would Remove to America" (1784); Thomas Jefferson, *Notes on the State of Virginia* (1785).
- (7) Thomas Perkins Abernethy, ed., *Notes on the State of Virginia* (Harper Torchbooks, 1964), vii-xvi; Leo Marx, *The Machine in the Garden: Technology and the Pastoral Ideal in America* (Oxford UP, 1964), 117-44.
- (8) Wardle, 186.
- (9) Arthur K. Moore, *The Frontier Mind: A Cultural Analysis of the Kentucky Frontiersman* (U of Kentucky P, 1957), 20-21; John Seelye, *Beautiful Machine: Rivers and the Republican Plan 1755-1825* (Oxford UP, 1991), 92; Robert Lawson-Peebles, *Landscape and Written Expression in Revolutionary America* (Cambridge UP, 1988), 52.
- (10) Wardle, 193; Flexner, 199; Tomalin, 146, 175.
- (11) Seelye, 91; Lawson-Peebles, 52.
- (12) David W. Noble, *The End of American History: Democracy, Capitalism, and the Metaphor of Two Worlds in Anglo-American Historical Writing, 1880-1980* (U of Minnesota P, 1985); Noble and Michael Fores, "The Metaphor for Two Worlds: The American West, Industrial Revolution in England, and Modernization Theory," *Soundings*, 68(1985), 139-59.